始

狂言百番

上

11
496

11-396

序

畫家が畫を成して形似の上に成功するは易い、是に依つて暗昧者を魅する事も易いのである。而して多くの畫家はこの程度に安んじ、又足れりとして居るのである。然し對象の內面に喰入り、對象卽ち自我の境地に入つて之を表現するに於て、初めて眞の繪畫を成す事を得るのである。栖鳳の巧なるは是が爲である。春擧の偉きは是に存する、而して山口蓼州君の狂言畫に於ける、嚴父の敎養と茂山氏の董陶とに依り、其蘊奧秘術を理解し之を彩管に托するのであるから、狂言なる古典時事物を描いて、而も夫に生命あらしめ得るのである。今日狂言畫に於て君は第一人者と言つてもよからう、夫には本書を見る人に等しく異存を挾む餘地はあるまい。

大正辛酉初冬

村上文芽

大正
11. 9.22
內交

花子「花子はやさしや」

通圓「扨も宇治橋の今こをよと見へし所に」

御田「つら憎い男の云ふた事の腹立」

三番叟

末廣がり

傘をさすなら春日山〳〵
人が傘をさすなら我も傘をさそよ、

福の神

樂しうなさては

かのをまじ、

大黒連歌

大黒連歌の面白さに、

狸

腹

皷

釣狐

クシくく、

釣狐

クワイ〳〵

福部の神

納まれる〳〵

都の春の鉢たゝき、

止動方角

はて先きへうせいと云ふに、

鼻取相撲

相撲はこう取る

ものじやいやい、

居杭

あーいたくく、

腰　祈

いつまで此ように

して居るのじや

文荷

實にも命ぞ唯頼め、

石神

樂、

宗論

なまうだ

れんげきやう、

彌宜山伏

再拜〳〵

ホロン〳〵

昆布賣

若狹の小濱の召の昆布

このシャキャ〳〵、

膏　藥　煉

ソリヤスエ〳〵

スワレワセヌ〳〵、

佛師

佛じやく

棒縛

是非に及ばぬそちに飲いでやろう

なに身共に飲いでくるゝか

伯母ケ酒

先おごいてやろう

ヤイ已れこちらを

見よるまいぞ、

萩大名

おつけ申そう、

二九十八

されば對面の致そう、

業平餅

あら恨めしの

餅やとて、

惣八

南無三魚頭をつぐ、

千鳥

濱千鳥の友呼聞は

ちり〳〵やく〳〵、

鈍　太郎

これは誰か手車

鈍太郎殿の手車、

財寶

釣する所に釣た所が

面白いもの、

猿

鞦

ハー一の幣立て

二の幣立、

靭　猿

なを千秋や萬歳と

俵を重てめん〳〵に〳〵、

素袍落

いたゞきやつれた

小原木、

素　袍　落

身共の機嫌のよいも此ような

素袍をもろをて御座る、

布施無經

小唄入

狐塚

のんぼり下りの

舟ひくホイ〳〵

右近左近

私は當所に住いする

右近と申お百性で御座る、

瓜盗人

行かんとすれば引とゞむ

留れば枝にてチャウト討つ、

墨

塗

ヨ

ヲ

ト、

佐渡狐

尾はふつさりと

太う長いものじや、

附子

たゝ喰へ〳〵

魚說經

先づ說法をするめなり、

因　幡　堂

イヤ是によねんものう
ねている巳喰さいてやろうか
引さいてやろうか、

蛟相撲

これきたあをげく、

木六駄

左せいほうせ〳〵

ちよう〳〵

丼　磴

ヤイ菊市はよう
渡さぬかいやい
ヤットナ〳〵、

千　切　木

已れ内に居よつたならば

此棒で打はたいてくりやう物を、

柿山伏

ヒーイヨロ〳〵〳〵

なんじやヒーイヨロ〳〵〳〵

圖罪人

急げ〳〵

雷

降つてらいつ〳〵

八百年が其間、

11
596

大正十一年二月十五日印刷
大正十一年二月二十日發行

編輯者　山口蓼洲

發行兼印刷者　京都市寺町通二條南入十九番戸
山田直三郎

京都市寺町通二條南入
合名會社　芸艸堂

振替口座大阪二五八番　電話長上二百九十番
電話上三八二四番

東京市本郷區湯島一丁目一番地
合名會社　芸艸堂支店

電話下谷七五三〇番
振替口座東京四〇九四〇番

不許複製

發賣所　美術書肆

發賣所　美術書肆

11
2
196

終